

南山宗教文化研究所蔵 オウム真理教関係未公開資料 の意義について

渡邊 学

WATANABE Manabu

まえおき¹

私は先ごろ、麻原控訴審弁護人編『獄中で見た麻原彰晃』を読み、深い脱力感に襲われた²。そこに書かれていたのは、すでに正常な判断能力を喪失して糞尿垂れ流し状態になった教祖の姿であった。無意味に「うんうん」と笑いを繰り返す麻原。彼によれば、マハーニルヴァーナに入ると脳死状態になるとのことだが、はたして彼はその状態になったのか。むろん、糞尿垂れ流し状態が、麻原が言っていた「マハーニルヴァーナ」(大涅槃)のわけはないだろう³。

私は、改めてオウム事件とは何であったのかと疑問を新たにしたのであった。

麻原彰晃・本名松本智津夫死刑囚側は、2008年11月10日に東京地方裁判所に再審請求をした。しかしながら、東京地方裁判所は、2009年3月17日にその再審請求を棄却し、同死刑囚側は3月23日に即時抗告した。

本論が、改めてオウム事件を考えるきっかけとなれば幸いである。

はじめに：南山宗教文化研究所の取り組み

南山宗教文化研究所のオウム真理教問題に対する取り組みは、当初1990年代のはじめにオウム真理教による南山中学高校に対する勧誘に対して警戒をもとめる勧告書を当時の第二種研究所員がまとめたのがはじめてだった。当時、他の所員は、オウム真理教にほとんど関心がなかったし、リベラルな立場をとる研究所としてそのような勧告書を承認することにあまり気が進まなかったというのが正直なところであった。

その後、1995年3月に地下鉄サリン事件が起き、日本の状況を海外に発信する必要からロバート・キサラ元所員が中心となっ

て、*Bulletin* に何度か寄稿した。

その成果は以下の論文集にまとめられた。

Robert Kisala and Mark Mullins, ed., *Religion and Social Crisis: Understanding Japanese Society Through the Aum Affair* (New York, Palgrave, 2001)

私自身、オウム真理教事件、カルト対策運動、脱会者の問題などに関して、さまざまな発表を行ってきた。

また、私は、南山宗教文化研究所がオウム真理教関係資料を収集するに当たって大きく関わってきた。オウム事件が起きた1995年9月、私は在外研究のため、ハーバード大学世界宗教研究センターに上級研究員として赴任した。当時、諸般の事情から同センターで在米のオウム真理教信者と接触することになった。当時、同信者の相談に乗り、気心が知れるようになった。そのため、同信者が脱会して1996年1月にオウム真理教ニューヨーク支部を閉鎖する折に個人的に約3,000冊に及ぶ書籍や複数のビデオを寄贈された。

私は、1997年2月末に在外研究から帰国する際にこれらの資料を持ち帰り、南山宗教文化研究所に寄贈した。これらは、ニューヨーク支部のものなので未公開の英文資料が多く含まれているのが特徴的である。多くは日本語の書籍や雑誌を英訳したものであった。その他一部、ロシア語の資料も含まれているし、『ヴァジラヤーナコース・教学システム教本』（非公開）のコピーも含まれている。

当時の支部長によれば、本部の指令で会費納入を義務づけたため、ニューヨーク支部会員はほとんど十数名程度であった。ロシア支部が2万人ほどの会員を集めたのは大きな対照をなしている。

ちなみに、私は、イアン・リーダー教授、ロバート・リフトン教授らにそれらの書籍が分配し、海外のオウム真理教研究の下地を作るのに協力した。

また、私は、1996～1999年にリフトン教授と研究協力した。96年と97年の夏には、同教授の別荘に1週間ほど泊まり込んでオウム真理教の文献や裁判資料の解説を手伝った。

その成果が以下の著書である。

Robert Jay Lifton, *Destroying the World to Save It: Aum Shinrikyo, Apocalyptic Violence, and the New Global Terrorism* (Metropolitan Books, 1999). [渡辺学訳『救済と終末の幻想—オウム真理教とは何か』岩波書店、2000年]。

その後、私は、1999年にあるオウム真理教元幹部の弁護団の求めに応じて、弁護団の非公式な相談役に就任した。そして、弁護団から『尊師ファイナルスピーチ』I～IV（非公開）を寄贈された。私は、同元幹部の裁判に陪席しながら、同元幹部と文通をしたり弁護団の会議に参加したりしてその相談にのった。

さらに、私は、2007年8月になり、匿名の元幹部から1991年ごろまでの資料を中心にした資料、千数百点の寄贈を受けた。これらの資料の中で主要なものは録音テープである。幹部が個人的にとった秘密会議の内容なども収録されている。

資料を保管していた元幹部には記録への強い意志があったため、古いガリ版刷りの資料や印刷物にはないカセットテープ（1985.12.31-1994.5.2）が多数含まれている。そして、すでに述べたように、公式の録音だけでなく、その幹部が個人的に録音した多数の秘密資料が含まれている。

また、段階を踏まえた教材（教本とカセットテープ）も多数そろっている。教材ビ

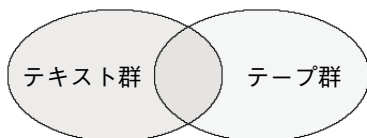
デオも多数存在する。これらのビデオを中心に分析することも可能である。カセットの数だけでも膨大なので、その分析には膨大な時間がかかるだろう。

録音資料による実証的研究の可能性

——ポア概念の端緒を探る

今回寄贈された資料の中には、オウム真理教裁判において検察の冒頭陳述等でしかその存在が確認できなかった重要な資料（とりわけテキスト化されていない説法）がいくつも存在していた。実際、それらは、オウム真理教を研究する上で大きな障害となっていた。つまり一次資料ではなく、裁判で引用された二次資料に頼らざるをえなかったためである。

ところが、今回入手した未公開の録音テープは、これらの一次資料を提供しているのである。そこで、テキストと録音テープの時系列的な関連づけによる実証的な研究がはじめて可能となる。



行事や事例の時系列

麻原彰晃がどの段階でヴァジラヤーナやポアの概念を導入したのかということは、研究史上において大きな論点となっていた。

検察の冒頭陳述（1996年4月24日）においては、1987年1月4日というきわめて早い日付が与えられている。当時は同教団が同年7月にオウム真理教と改称する前であり、いまだオウム神仙の会と名乗っていた時期であった。そのような早い段階ではたしてヴァジラヤーナやポアの概念が使われ

ていたのかどうかは、確かに大きな疑問点となりうるものであった。

今回入手した録音テープの中には「丹沢集中セミナー」（1986年12月31日～87年1月4日）全5巻があり、その中に検察が引用した文章も見出されることがわかった。

検察は、1996年4月24日に行なわれた東京地方裁判所第一回公判における検察側冒頭陳述でも明らかなように、オウムがオウム神仙の会を名乗っていた1987年の段階で、麻原彰晃がヴァジラヤーナの教えとして殺人を勧める説法を行い、それにしたがって信者たちが1989年の田口修二事件や坂本事件を起こしたと主張している。

それに対して、島田裕巳氏は、『オウム——なぜ宗教はテロリズムを生んだのか』（トランスビュー、2001）の中で、むしろ1989年2月に発生した田口修二事件⁴の合理化のためにヴァジラヤーナの教えを説いたのではないかと述べている⁵。「麻原が殺人を肯定するヴァジラヤーナの教えを説いていたのは、オウムが東京都に宗教法人の認証を求めていた時期にあたり、認証されるまでにかざられている」⁶。さらに、「殺人を肯定する教えを説くきっかけとなる出来事」として以下の指摘を行っている。

[1989] 4月7日以前に起こった重要な出来事として、悪業の問題と深くかかわっていると考えられるのが田口修二リンチ殺害事件である。検察側は第一章で見たように、殺人を肯定する教えを説いていた麻原が、その教えにしたがって田口の殺害を命じたのとらえている。しかしすでに述べたように、1987年1月4日の時点では、麻原が殺人を肯定するヴァジラヤーナの教えを説いていなかった可能性が高い。たとえ検察側が主張するように、その時点で殺人を肯定する説法が行われていたとしても、少なく

ともそのなかでは悪業についてはまったくふれられていない⁷。

おそらくその根拠は、出版物となっている『システム教本』「第三話」(1989年4月7日)において悪業をなしている人をトランスフォーム(ポア)させることがその人にとってプラスになると述べているのを受けてのことだろう⁸。

しかしながら、もし1987年の段階のテープが実際に存在しているとすれば、これは検察側の論拠となる決定的な証拠となる。1996年4月24日に行なわれた東京地方裁判所第一回公判における検察側冒頭陳述は以下の指摘をしている。

被告人は、昭和62(1987)年1月4日に行なわれた丹沢集中セミナーにおける教団の信者らに対する説法において、「チベット密教というのはねえ、非常に荒っぽい宗教で、例えばミラレパが教えを乞うた先生の一人にね、「おまえはあの盗賊を殺してこい」と、やっぱり殺しているからね。そして、このミラレパは、その功德によって修行を進めているんだよ。私も過去世において、グルの命令によって人を殺しているからね。グルがそれを殺せというときは、例えば相手はもう死ぬ時期にきている。そして、弟子に殺させることによって、その相手を『ポア』させるというね、一番いい時期に殺させるわけだね」などと述べ、その後も、教団の信者らに対する説法において、「ヴァジラヤーナの教え」と称し、「結果のためには手段を選ぶ必要がない。例えば、ここに悪行を積み、寿命が尽きるころには地獄に落ちるほどの悪行を積んで死んでしまうと思われる人がいたとして、成就者が生命を断たせた方がいいんだと考えて『ポア』したという事実は、人間界の客観的な見方からすれば単なる殺人であるが、ヴァジラヤーナの考え方が背後にあるならば、これは立

派な『ポア』であり、知恵ある人が見たら、殺された人、殺した人、ともに利益を得たと見る」などと述べ、教義を実践するために被告人が必要と認めれば、人を殺害することも正当な行為である説き、これを「ポア」と称していた。

ここで最初に引用されている資料は、文献として未発表のものであり、その記録の存在を含めていままで確認されていなかったものであった。そのため、オウム真理教の教理の研究の一端は、孫引きの形で検察側の冒頭陳述などに依拠せざるをえなくなっていたのである⁹。

「完璧な功德」をめぐる麻原の質疑応答のテープ起こしによる検証

今回、私が入手した録音テープは、このような状況を打破する重要な資料となっている。ここで、「丹沢集中セミナー」の録音テープ(1986年12月31日～1987年1月4日)を使ってその内容を確認してみたい。問題の箇所は、丹沢集中セミナーと題するテープの5巻中第3巻に収録されているが、これは麻原の弟子との質疑応答が集められたものである。質問者が「完璧な功德」とはどのようなものであるかと問うたのに対して、麻原が以下のように答えている。長くなるが、私のコメントを差し挟みながら、その質疑応答の全体をここに引用することにした。

麻原は、フロアから「完璧な功德」とは何かと問われて、まず大枠で答えようとする。

質問者 完璧な功德というのはどのようなものを言うのでしょうか。

麻原 うーん、むずかしいね。なぜむずかしいかというと、みんなが考えているように、ここまでが功德だというランクがない

んだよね、一言で言うと。たとえば、過去生から私のカルマを見ていると、もう連続として何億劫、何十億劫という間、いろいろな形で功德を積んできている。しかし、それがパーフェクトであるかといったら、そうではないかもしれない。劫というのは400万年のことだったね¹⁰。

一言で言うならば、土壇場に追い込まれたときも、他のこと、他の人のことを考えられるかどうか。もしそのステージに入ったならば、それは完璧な功德と言うことができるだろう。だから、先ほど私が言った、地獄に堕ちた段階で、地獄の他の住人のことを考えることができたなら、それは完璧な功德だろうね。

ここまでのところでは、麻原は、地獄に堕ちるような極限状態におかれても利他的な態度を持ち続けること——そのような利他心を持っていたならそもそも地獄に堕ちることがないであろうが——が「完璧な功德」であると言っていて、その点に関しては疑問がない。

さらに、質疑応答は以下のように続いている。

質問者 じゃあ、いつでも他人のために行動していく…。

麻原 だから、それが非常にむずかしいんだ。それはたとえば、私は電車ではね、席を譲らないんだよ。特にご老人がいらっしゃる場合は。じーっと見ている。そして、この人は代わってもいいなと思ったら代わる。そうでない場合には決して代わらない。それはなぜかという、そのひとに肉体がある場合の方がね、苦痛というのは和らぐんだよ。つまり、そのひとを楽させてあげることによって、その老人の悪業のカルマが、また増えたり、あるいは、減らなかつたりすることは、大乘の修行者にとってはプラスではないんだよね。

わかるかな、言っていることが。

質問者 じゃ、そのへんの見極めができなかったら、座席を譲ってもぜんぜん徳にならない…。

麻原 譲った分にはそれは徳になるだろうよ、少しはね（笑）。譲った分は徳になるだろうけど、見極められたらもっといいということだ。完璧なというのはそういうことなんだよ。

ここで麻原は、利他的な行動に関してある種の保留を行って、相手の機を見極めることによって利他的な行動をするかどうかを決める必要があると述べている。このあたりの言動には、後年の「カルマ落とし」の先駆がみられる。つまり、ひとは、この世でカルマを精算した方がよいので、苦勞もまた否定的にばかりは評価できないということである。

麻原は、以下においてチベット密教の逸話を語ることによっていよいよ核心に迫っている。

たとえば、密教修行者のティローパが魚をわざわざ、生きた魚を焼いて、殺して、食べている。彼は完全な成就者になったわけだね。それは、何をやっていたか、ポアをやっていたわけだね。魚の魂を上昇させるわけだ。他の世界へ。高い世界へ上昇させるんだから、ティローパは功德を積んでいるわけだ。わかるかな。ところが、釈迦牟尼の「殺生するなかれ」ということばから言ったら、殺生しているわけだ。わかるかな。

この逸話は、ラマ・ケツン・サンポ、中沢新一共著『虹の階梯』（平河出版社、1981年、pp. 145-47）に見られるものである。私が最初期の信者にインタビューしたところ、その人物は教団においてその本の読書会が行われていて、最初期の信者たちはその内容について熟知していたとのことであった。

その意味で、1986 年末から 1987 年初頭に麻原の口から「ポア」(チベット語で魂の「転移」を意味する) という言葉が出てきたとしても不思議ではないだろう。ここでポアとは、相手を殺害することによってより高い世界に送り届けることを意味していると言っよう。

麻原は、さらにそのことを転義的に用いている。つまり、師の命令で弟子が殺人を犯すことが功德になるとすら述べているのである。これは、代理による利他的殺人に他ならない。

だから、もう定義上の問題で非常にむずかしいんだね、そこは。だから、ランクに応じてそのひとがそのときにできる最高のことをやる——これしかないと思います。だから、たとえばね、インドのヨーガの。

そうだね、チベット密教というのはねえ、非常に荒っぽい宗教でね、たとえばミラレパは、教えを請うた先生の一人にね、「おまえはあの盗賊を殺してこい」と、やっぱり殺しているからね。ミラレパはみんな、よく知っていると思うけど。そして、ミラレパはその功德によって、修行を進めている。だから非常に功德というのはむずかしいわけだ。

このくだりは、おおまのり訳編『ミラレパ』(1976)に見出される。ミラレパは、当初、黒魔術を使う大呪術師として描かれており、ラマから法を受け取るためにその命令に従ったことが書かれている¹¹。

さらに、麻原は、さまざまなヨーガの法門を示してそれぞれによって功德の求め方が異なることを示している。

だから、どの門の修行に入るかによって功德は若干変わります。

まずオーソドックスなやり方をするとするならば、まずとにかく禁戒を守って、[不]

殺生、[不] 偷盗、殺さない、盗まない、これから入っていくプロセス、そして、先ほどのあれに入っていく。[[]:内引用者補足。]

そして、グルとグルの弟子たちと修行の段階で変わってくるわけだ。だから、どちらのプロセスで入っていくか、また、そのひとがどのステージに入っているかによってね、非常に複雑になってきます。むずかしくなります。

それはこういうことなんだよ、言い方を変えれば。たとえば、ジュニアナ・ヨーガにおいてはね、分析する力がもともとある人こそ、そのジュニアナ・ヨーガに向かざるをえない。わかるよね。

それから、ラージャ・ヨーガについては、とにかく頑固者、意志の強い人、この人こそが向いているわけだね。

逆に、クンダリニー・ヨーガについては、透明に近い人、真っ白な人ね。つまりグルがプリントしたときにぼっとその色に染まれる人。この人こそが、クンダリニー・ヨーガに向いているわけだ。そうなってくると、それに対する背景の功德というものがね、変わってくるわけだ。わかるかな、言っていることが。

たとえばね、一日 20 杯水をかぶると決めて、とにかく死ぬまでかぶり続けたと。これは何のプロセスかわかるね、もう。ラージャ・ヨーガのプロセスだ。そして、このラージャ・ヨーガのプロセスである水をかぶること、これはラージャ・ヨーガにとって功德となるわけだ。

そして、たとえば、とにかく何でもかんでも、これは何と、ワット・イズ・デイスだね、これは何、これをいつもやっていると。そして、フーはだね、私はだれ、これをいつもやっている人。この人はジュニアナ・ヨーガに向いているわけだ。そして、ジュニアナ・ヨーガの功德を積んでいるというわけだ。

このように、オーソドックスな法門、ジュニアナ [一般的にはジニャーナ jñāna と標記される識]・ヨーガ、ラージャ [rāja 王]・ヨーガ、クンダリニー [kuṇḍalinī]・ヨーガに分けて論じている。そして、とりわけクンダリニー・ヨーガについて以下のようにくわしく論じている。

そして、クンダリニー・ヨーガにおいては、グルグルグル、グルグルグル、ああ、グルグルグル、グルのためにはいつ死んでもかまいません。グルグル、頭の中にはいつもグルのことばかり。グルのためだったら死ぬ。グルのためだったら殺してもやるよ。こういうタイプの人ね。この人はクンダリニー・ヨーガに向いている人なんだね。わかるかな。そして、そのグルがやれと言ったことすべてをやることができる状態——たとえばそれは殺人も含めてだ——これも功德に変わるんだよ。

だから、そのどのプロセスをたどっていくか、条件によって変わってくるわけだ。そしてそれは、今の日本のね、宗教理念から言ったらね、特に最後のクンダリニー・ヨーガは受け入れられづらいだろうと、私は考えている。

私も過去生において、グルの命令によって人を殺しているからね。自分が死ぬか、カルマになる人を殺すということはできないものだよ。しかし、そのカルマですらグルに捧げたときに、クンダリニー・ヨーガは成就するんだよ。わかるかな、言っていることが。だから、その背景となるもの、修行法によって変わってくるわけだ。いや、じゃあ、おかしいじゃないかと。それは人を殺したんだからカルマになるんじゃないかと。でも、それはそうじゃないんだよ。たとえば、グルが人を殺せと言うときには、たとえば相手は死ぬ時期に来ている。そして、弟子に殺させることによってその相手をポアさせる。一番いい時期に殺させるわ

けだね。そしてたとえばもう一度人間界に生まれ変わらせて、修行させてだね。いろいろとあるわけだ、それは。

だから、功德については非常に説明しづらい。ただ無難な部分は先ほど言った、釈迦牟尼の言葉を借りるならば、仏陀と仏陀の説く法と仏陀の弟子たち、サンガね、サンガに帰依し供養するという、それから、殺さない、盗まない、よこしまなセックスをしない、嘘をつかない、心の乱れる酒の飲み方をしない、ということになっています。そして、私も、それが無難だろうなと思っている。いいかな、それで。[検察側冒頭陳述に対応している部分を傍点で示した。]

質問者 はい。わかりました。

ここでいわれているのは明らかに、本来の意味でのクンダリニー・ヨーガではない。その点、島田が疑問を呈しているのもっともである¹²。島田は以下のように指摘している。

クンダリニー・ヨーガはラージャ・ヨーガの次の段階で、マハー・ムドラーの前の段階にあたる。第三章で述べたように、グルへの絶対的な帰依が強調されるのは、マハーヤーナの修行法にあたるクンダリニー・ヨーガにおいてではなく、ヴァジラヤーナの修行法であるマハー・ムドラーにおいてである。グルのために人殺しをする人間はクンダリニー・ヨーガに向いているという麻原の説明は、他の説法での説明とは大きく異なっている。何か麻原の説法ではないような印象さえ受ける¹³。

クンダリニー・ヨーガとは本来、尾てい骨あたりにあるとされるムラゲーラ・チャクラに潜んでいるとされるクンダリニーと呼ばれるエネルギーを覚醒させてそれを体内の気道に沿って上昇させ、すべてのチャ

クラを活性化し、頭頂に抜けさせることをめざす修行法のことを意味している。

ところが、ここにおいて麻原は、後年、教団内で後年ヴァジラヤーナ（和訳で金剛乗であり、本来は金剛頂教系の密教や真言密教の立場を意味するが、オウム真理教の場合には異なる）と呼ばれるグル崇拜の立場を表す言葉としてクンダリーニー・ヨーガを用いていると考えられる。

興味深い点の一つ指摘すれば、麻原のこのような見解に対してフロアの人々が質問者を含めて動揺を示していないことである。ある意味で、すでにこの段階でグル崇拜的な心性が浸透していたといえるかもしれない。

冒頭陳述の引用のおわりの部分の典拠をめぐって

また、検察の冒頭陳述の後半の引用箇所は、『ヴァジラヤーナコース・教学システム教本』第3話（1989年9月24日世田谷道場）に見出される¹⁴。

[成就者が]すべてを知っていて、[Aさんを]生かしておくとは悪業を積み、地獄へ落ちてしまうと。ここで例えば、[成就者がAさんの]生命と絶たせた方がいいんだと考え、ポワさせたと。…客観的に見るならば、これは殺生です。…しかし、ヴァジラヤーナの考え方が背景にあるならば、これは立派なポワです。…智慧ある人がこの現象を見るならば、この殺された人、殺した人、共に利益を得たと見ます。[[] 括弧内引用者補足。]

先の質疑応答の2年半後に行われた説法のこの箇所では、すでにヴァジラヤーナの概念が用いられている。ここでは、ポアではなくポワが用いられているが、「魂の転移」

を意味する同じ言葉である。ここでは、成就者が弟子などの他者に命じて将来悪業を積む可能性のある人間を殺害することが「魂の転移」を意味して、殺害された人にも殺害した人にも益があることを指摘している。

ラマ・ケツン・サンポ、中沢新一共著『虹の階梯』（平河出版社）は1981年、おおえまさのり訳編『ミラレパ』（オームファンデーション、1976年、その後、めるくまーる社、1980年）もすでに1976年に出版されている。麻原の教理は、これらの文献と直結していると考えられ、それらをポアの概念の典拠としていると推測される。

また、麻原は、桐山靖雄の阿含宗が真言密教や阿含経典に依拠しているのに対して差異化しようとして、チベット密教とそのグルイズムを志向したのではなかろうか。

いずれにせよ、麻原が1987年初頭の段階ですでにポアの概念を使っていたこと、また、その段階ではヴァジラヤーナという用語は用いていなかったものの、それに相当する意味内容をクンダリーニー・ヨーガの概念に盛り込んでいたことの2点が、以上の分析から明らかになったと言えよう。

おわりに

オウム裁判においては、大半の幹部が取監され、多くの幹部が死刑判決を受け、そのインタビューもままならぬ状態になっている。オウム裁判で検察側が依拠した証拠は、ものによってはテキストとして存在せず、その資料による検証が困難な状態にあった。

今回、南山宗教文化研究所が入手した大量の録音テープは、このようなギャップを埋めるための大きな手がかりを提供している。

今後、重要なテキストと録音テープを照合する作業が必要であろう。

とりわけ、『ヴァジラヤーナコース・教学システム教本』のそれぞれの章は、講演や説法に基づいているのであり、それらを録音によって裏付けることもできよう。そして、それらのテープ起こしと録音テープとを照合することによって、さまざまな様相がわかってくるかもしれない。

さらに、テキストと録音テープを外的な行事や事件との関連において時系列的に配置することによって、新たな発見や根拠付けが可能になると考えられる。

そのためにも録音データのデジタル化の作業を粛々と進めたいと考えている。

最後に、宗教教育的な観点から言えば、

伝統仏教において師資相承の法脈が重要視されていることに思いがいたされる。新宗教の場合、よく言えば独自、悪く言えばこじつけのような解釈がどうしてもなされることが多い。オウム真理教の場合も、教祖の肥大化した欲望を満たすためにチベット仏教の教理が悪用された感が否めない。

新宗教には新宗教の生命があり、その尊厳を尊重しなければならないとはいうものの、そのリスクも同時に十分に自覚しなければならないことを学生や生徒に教えることが有益ではないかと思われる。

オウム真理教関係年表

年	月日	オウム真理教関係	社会的事象
1952	7.10		
1955	3.2	松本智津夫が熊本県金剛村で7人兄妹の4男として生まれる。	
			〈オカルト・ブーム〉コリン・ウィルソン『オカルト』、五島勉『ノストラダムスの大予言』出版。
1974			〈超能力ブーム〉ユリ・ゲラーがテレビでスプーン曲げを実演。映画「エクソシスト」上映。
1976			おおえまさのり訳編『ミラレバ』（オームファンデーション）
1978	1.7	松本が石井知子と結婚、千葉県船橋市で鍼灸院を開業。	映画「未知との遭遇」、「スター・ウォーズ」上映。
1979			〈精神世界の本のブーム〉『ムー』（学研）創刊。
1980			おおえまさのり訳編『ミラレバ』めるくまー社から再刊
1981			ラマ・ケツン・サンボ、中沢新一『虹の階段』（平河出版社）
1982	7.13	松本が薬事法違反で、20万円の罰金刑を受ける。	
1983		鳳凰慶林館設立：「サイコロジー・カイロプラクティック理論・東洋医学理論・ヨーガ理論・漢方理論を応用した食餌療法」（ヨーガ道場）	『トワイライト・ゾーン』（ワールド・フォトプレス社）改題創刊。

年	月日	オウム真理教関係	社会的事象
1984	2.14	東京都渋谷区で「オウムの会」を設立。松本ははじめて麻原彰晃と名乗る。*小乗（自己の解脱・悟りに到達する）の教え。信徒6名。	
	5.28	「株式会社オウム」を設立登記。	
	9.5	『トワイライトゾーン』に特集記事。	
1985	秋	雑誌『ムー』などに麻原の“空中浮揚”写真を掲載。	
	12	信徒数15名。	
1986	1頃	*麻原は自らをアビラケツノミコトと称し、ハルマゲドンの後の世を統治する旨の発言をはじめる。	
		『新鮮』『週刊プレイボーイ』『ウータン』などが空中浮揚を取り上げる。	
	3	麻原のはじめての著書『超能力秘密の開発法』を出版。この頃から「グル」を名乗り、「シャクティパット」等のイニシエーションを有料ではじめる。	
	4	オウム神仙の会と改称。	
	7	インドに渡航。ヒマラヤで解脱を得たという。「最終解脱」と自称。	86.4.26 ソ連ウクライナ共和国キエフ州北部のチェルノブイリ原子力発電所で原子炉の爆発・火災事故が発生。
	10	本部を世田谷区に移転、出家制度をスタート。信徒数35名。	
	12頃	『生死を超える』刊行。	
1987		大阪支部など各地に支部を設置して信者の拡大を進め、教団信者らに対し、ハルマゲドンの到来を預言するとともに、これを防ぎ、人類を救済するためには、教団において今世紀末までに3万人の解脱者が必要である旨の説法を行い、多数の出家信者を獲得する必要性を説くようになる。	
	1.4	丹沢集中セミナーで「タントラ・ヴァジラヤーナ」「ボア」の説法。	
	2	信徒数600名。	
	3	『超能力秘密のカリキュラム・健康編』刊行。	
	7	団体名を「オウム真理教」と改める。信徒数1300名。	
		『マハーヤーナ』誌刊行はじめる。	
	8.1	『イニシエーション』刊行。「日本でただ一人の最終解脱者」と紹介。	
	11	ニューヨーク支部を開設。初代支部長は上祐史浩。	
	12	名古屋支部開設。	
	1988	3	「血のイニシエーション」をスタート。
4		*この頃から殺人を正当化する教えを広く唱える。(86.12参照) 札幌支部開設。	
8		静岡県富士宮市に富士山総本部道場を開設。日本シャンバラ化計画を打ち出す。全国各地に拠点を設置・拡大し、わが国にシヴァ大神の化身である麻原が統治する祭政一致の国家を建設するとの教えを唱える。 信徒数3000名。	
9		富士山総本部道場で死亡した在家信者〔真鳥照之〕の遺体を護摩壇で焼却する。	

年	月日	オウム真理教関係	社会的事象
	11	東京都江東区に東京総本部道場を開設。	
1989	1	* オウム真理教が秘密金剛乗の教えに基づき、武力により諸国民を支配するとの教えを唱える。	
	1.17	東京都が宗教法人認証のための第一回現地調査。	
	2	田口修二さんリンチ殺害事件発生。	
	2	『滅亡の日』刊行。	
	2.21	東京都が宗教法人認証のための第二回現地調査。	
	3.1	東京都に宗教法人の認証を申請。	
	4下旬	東京都庁や文化庁に対して認証に向けた抗議行動。	
	6.22	坂本堤弁護士ら、「オウム真理教被害対策弁護団」を結成。	
	8.25	東京都が「オウム真理教」を宗教法人として認証。	
	8.29	オウム真理教が宗教法人設立を登記。	
	10.2	『サンデー毎日』が「オウム真理教の狂気」の連載を開始。麻原ら編集部に抗議に押しかける。	
	10.21	「オウム真理教被害者の会」を結成。	
	10.26	早川紀代秀、上祐史浩、青山吉伸がTBSに抗議、放送中止を要求。	
	10.31	早川、上祐、青山が横浜法律事務所と坂本弁護士と面会。	
	11.4	坂本弁護士一家殺害（当初は失踪）事件発生。	
	11.23	麻原が西ドイツのボンで記者会見し、坂本弁護士一家失踪事件との関係を否定。	1.11 ルリンの壁が崩壊、翌年、東西ドイツが統一される。 1.11 ミソ首脳による冷戦終結宣言。「ヤルタからマルタへ」
		出家者 330 名、信徒 4000 名。	
1990	1.7	麻原ら幹部 25 名が「真理党」を結成して衆議院総選挙に出馬を表明。	
	2.16	衆議院議員総選挙で東京四区から立候補した麻原が 1783 票で落選。	
		麻原が遠藤誠一らにボツリヌス菌培養を指示。	
	3	麻原が第一サティアンで幹部たちに、「人類を救えるのはヴァジラヤーナしかない。今の人類はボアするしかない」と無差別殺人を説く。ヴァジラヤーナ路線の開始。 * 武力による現行社会秩序の破壊が必要であると唱える。	
	4	都内で大量のボツリヌス菌散布による無差別殺人を計画し、信者を避難させるため石垣島セミナーを開催するが菌の分離に失敗。 出家信者が 300 名から 800 名に急増。	
	5	熊本県波野村に約 15 ヘクタールの土地を取得し、造成を開始。	
		ホスゲン爆弾を製造し、マスコミや官庁などで爆発させて散布するという無差別大量殺人計画を立案。	90.8.2 イラク軍がクウェートに侵攻。
	10	波野村の造成問題で、熊本県警が早川、青山を国土利用計画法違反などで逮捕。後に、石井久子も逮捕。全国の教団施設に対して強制捜査。上記、殺人計画が頓挫。信徒数 5000 名。	

年	月日	オウム真理教関係	社会的事象
1991	春	山梨県上九一色村に教団施設郡の建設を開始。	91.1.17 多国籍軍がイラクへの空爆、湾岸戦争勃発。
	3.7	NIFTY-Serve FMISTY「オウム真理教会議室」開設。	
	9	『キリスト宣言』刊行。	
	9.14	オウム真理教ネット開局。	
	9.28	麻原ら、「朝まで生テレビ」に出演、「幸福の科学」の代表と論戦。	
	9	『人類滅亡の真実』刊行。	
	10	『ノストラダムス秘密の大予言』刊行。	
	11	モスクワに「ロシア日本大学」を設立。	
1992	2	麻原・ロボフ会談でロシア進出が決まる。	
	3	麻原が約300人の信者を連れ、ロシア救済ツアーを実施。	
	4	ロシア極東からラジオ放送エウアングリオン・テス・バシレイアス開始	
	9	モスクワ支部を開設。	
	9	石川県オカムラ鉄工乗っ取り、麻原が社長に就任。	
	9頃	*この頃からハルマゲドンについて各地で予言。	
	10-11	各地の国立大学で講演、近々ABC兵器による世界終末戦争が起これ、大都市に壊滅的打撃があることを予言。	
	12.10	東京都港区に東京総本部道場を開設。	
	12	麻原、早川にロシアでの自動小銃密造のための調査を指示。	
1993		ヴァジラヤーナの教義をより明確にしたいいわゆるヴァジラヤーナ五仏の法則を教団幹部に説くようになる。	
	2	石川県オカムラ鉄工倒産。工場機械をオウム施設に移動。	2月末、アメリカ、テキサス州ウェイクでブランチ・デヴィディアンと捜査当局が銃撃戦を演じ、同教団の籠城が始まる。
	2.28	村井秀夫らがロシアから自動小銃密造のための調査を指示。	
	3	麻原が村井を通じて、土谷正実に毒ガスの大量生産に向けた研究開始を指示、早川には毒ガス製造プラントの建設を指示。 *「…警察や公安等の弾圧が行われている。これに対して断固戦うべきである。国家に対する対決姿勢を示さなければ、私と私の弟子たちは滅ぶ」と唱える。	
	3	麻原、97年にハルマゲドンが起これと予言。	
	3	*『麻原彰晃、戦慄の予言』刊行。	
	4.9	麻原、説法ではじめて「サリン」について言及する。	
	4	自動小銃製造工場となった「清流精舎」を建設。	4.19 ブランチ・デヴィディアンを連邦捜査局が強制排除を敢行、出火などにより72名が焼死、惨劇が幕を閉じる。
	6	教団のダミー会社が毒ガス精製用試薬を購入。	
	6.6	越智直紀さん死体損壊事件	

年	月日	オウム真理教関係	社会的事象
	6～7	生物兵器であり毒性を有する炭疽菌を首都圏一帯に噴射して住民を殺害するという計画を立てる。教団亀戸道場で二度にわたり炭疽菌を散布するが、悪臭を発しただけで失敗に終わる。	検察資料では平成3(1991)年。
	7	『麻原彰晃、戦慄の予言』第二弾を刊行。	
	8	土谷がサリン大量生成方法を完成、村井はサリン70トン生産計画を麻原に説明し、了解を得る。空中散布による無差別大量殺戮計画。	
	9	第7サティアンが完成。	
	10.25	麻原が「教団施設が毒ガス攻撃を受けている」と説法。	
	11	大型ラジコンヘリを2機購入するが、岐部哲也が操作に失敗し、大破。	
		土谷と中川智正がサリン600グラムの生成に成功。村井は二人に5キロ生成を指示。	
		モスクワで私設警備会社「オウムプロテクト」を設立。	
	12	早川が旧ソ連製大型ヘリを購入。麻原が土谷にLSD製造を指示。	
	12.18	土谷と中川がサリン3キロ生成に成功、八王子市の創価学会施設の周辺で噴霧し、池田大作名誉会長殺害を図るが失敗、新實がサリンを吸入し、重体に陥る。	
	12末	麻原は村井を通じ、土谷と中川にサリン50キロ生成を指示。	
1994		「キリストのイニシエーション」(LSD)、「ルドラチャクリンのイニシエーション」(LSD+覚醒剤)、「バルドーの悟りのイニシエーション」(麻酔薬)などを実施して、出家の強要や教義のすり込みを行う。	
	1.30	落田耕太郎さんリンチ殺害事件発生。	
	2	中川らがサリン30キロ生成に成功。	
	2.22	教団幹部が中国旅行。旅行参加者に説法を行い、真理の実践のためならば殺生や偷盗も許されるなどとするいわゆるヴァジラヤーナ五仏の法則を教授。その指示のもとに違法活動を行うことの意義を説き、ヴァジラヤーナ要員としての心構えを植え付ける。	
	2.27	麻原が東京都内のホテルに教団幹部十数名を集め、「サリン70トンをおちまくしかない」などと述べた上、滝沢和義らに対し、サリンプラントの建設進捗状況を報告させるなどした。	
	2.28	麻原が千葉市内のホテルに横山真人らを呼び、一千丁の自動小銃製造を指示。 *「1997年は真理元年の年、日本の王として君臨する。真理に仇なす者はできるだけ早く殺す」と唱える。	
		その後、麻原は全国の支部を回るなどして説法を続け、出家信者らに軍事訓練を行わせた。	
	4	村井が土谷に爆薬サンプルの製造を指示。富士川川口付近でサリンの噴霧実験を行い、中川がサリン中毒にかかる。	94.4. NATO米空軍機によるボスニア空爆開始。
	4	オウム信者たちがロシアで軍事訓練を受ける。同年9月にも行う。また、帰国の際には、日本国内で使用するため化学兵器等の検知器、LSDの原料および小銃の実弾などを持ち帰らせる。	

年	月日	オウム真理教関係	社会的事象
	5.1	土谷と遠藤がLSDの合成に成功。麻原は人体事件の後、「キリストのイニシエーション」として活用。	
	5.9	滝本太郎弁護士サリン殺人未遂事件発生。	
	6.1	旧ソ連製大型ヘリが到着。	
	6	村井が土谷に覚醒剤製造を指示。	
		教団組織の改編。教団組織として省庁制を採用。22省庁を開設、大臣と次官を置く。	
	6.27	松本サリン事件発生。	
	7	麻原が中川にサリン70トン生成を指示。サリン製造プラントが一部稼働をはじめる。	
	7.9	第七サティアン付近で悪臭騒ぎが起きる。15日にも同様の騒ぎ。	
	7.10	富田俊男さんリンチ殺害事件発生。	
	8	村井が青酸、ホスゲンなどの製造を指示。	
	9.20.	江川紹子ホスゲン襲撃事件発生。	
	10	LSDや覚醒剤を使ったイニシエーションを開始。	
	11	警察による捜査情報が流れ、サリンプラントを肥料プラントに偽装。 電気ショックで記憶を消す「ニューナルコ」を開始。	
	12.2	水野昇さん vx 襲撃事件発生。	
	12.5	元日劇ダンサー長女監禁事件発生。	
	12.9	ピアニスト監禁事件発生。	
	12.12	浜口忠仁さん VX 殺害事件発生。	
1995	1.1	「上九一色村でサリン残留物検出」との報道を受け、第七サティアンにシヴァ大神の像を造るなど偽装工作を開始。	1.17. 阪神淡路大地震
	1.4	被害者の会の永岡弘幸会長 vx 撃事件発生。	
	2.28	目黒公証人役場の假谷清志事務長の拉致、監禁（致死）事件発生。	
	3.15		3.15. ロシア・モスクワ地区裁判所、オウム真理教の資産の差押。
	3.18	麻原が村井に地下鉄サリン事件の総指揮を指示（リムジン内共謀）。	
	3.20	地下鉄サリン事件発生。	
	3.22	上九一色村など全国の教団施設への強制捜査。	
	3.23	ロシア発のラジオ番組で、「私は君たちが…救済計画の手伝いをしてくれることを待っている」と呼びかける。 *この日本は1996年の終わりを契機として大きな転換に至る。その前に大きな殺戮がなされると唱える。	3.23 ロシア・モスクワ地区裁判所、オウム真理教の宗教活動の禁止。
	3.26		3.26 ロシア日本大学炎上。
	3.30	国松孝次・警察庁長官狙撃事件発生。	
	4.8	林郁夫を逮捕。	
	4.18		4.18 ロシア全土のオウム真理教の宗教活動禁止命令の判決下る。

年	月日	オウム真理教関係	社会的事象
	4.19	サリン防止法成立。 同日、横浜異臭事件発生。	4.19 アメリカのオクラホマ・シティ連邦政府ビル爆破事件が起こり、死者・行方不明者 230 名に上る。
	4.23	村井秀夫刺殺事件発生。	
	4.30	地下鉄新宿駅トイレに青酸ガス発生装置を仕掛けるが失敗。5月3日、5日も試みるが、5日に発火炎上しただけですべて失敗。	
	5	『日出づる国、災い近し』刊行。 *「不当逮捕を続けるなど、決してやってはならないことをやり、それをさらにエスカレートさせていっている。必ずや神の怒りが爆発するであろう。予言者を弾圧した場合、このような激しい国家的な災難に遭わなければならない」と唱える。	
	5.6	林郁夫の自供で地下鉄サリン事件の全容解明。	
	5.16	麻原彰晃を逮捕。東京都庁で小包爆弾が破裂、秘書が重傷。	
	5.20	神奈川県警が岡崎（佐伯）一明の自首調書を作成。	
	9.6	坂本弁護士一家の遺体発見。岡崎を逮捕。	
	10.7	上祐を逮捕。	
	10.25	麻原が弁護人を解任。	
	10.30	東京地裁が宗教法人「オウム真理教」に解散命令。12月19日に東京高裁が教団側の即時抗告を棄却。	95.10.31 米国上院委員会が「大量破壊兵器のグローバルな拡散——オウム真理教の事例研究」に関する公聴会を開催。
	12.20	初の破壊活動防止法を公示。	
	12.22		95.12.22 ジャック・ギユイヤールがセクト調査委員会報告書「フランスにおけるセクト教団」をフランス国民議会に提出。
1996	3.28	東京地裁が教団の破産を宣告。	
	4	獄中の麻原は、「いいですよ。寝たきり老人になりますから。」「私がやっていることはレジスタンスです。」と言う。	
	4.24	麻原の初公判。	
	10	第13回公判を契機にして、麻原は拘置所内で大声を発するなどの状況を示し、保護房に収容されることが増える。入浴を職員が介助するようになる。自分で起床することができなくなり、日中も横臥して職員に注意されるが、問い掛けに答えなくなる。	
	10.18	第13回公判で麻原は井上嘉浩に対する反対尋問の際に体を激しく揺すったりして異常な態度を示す。帰所後、「俺の弟子は…」「くそー」と泣き叫びながら、チーズを壁に投げつける。「新實の言ったことは嘘だ」、「落田の首ねっこをつかんだのは本当だ」などと泣きながら独り言を言い、翌早朝まで弟子の名前を挙げるなど、その後も断続的に独語が続く。	
	10.21	「早く、精神病院に連れて行け」と大声を発し続けて保護房収容。	
	10.28	この日は弁護人面会に出たが、この頃から面会を拒否しはじめ、以後、独語が目立つようになる。	

年	月日	オウム真理教関係	社会的事象
	11 頃	麻原は職員に対して「ここから出れるんですか?」といった質問を繰り返すようになる。	
1997	1.31	オウム真理教に対する破防法適用を棄却。	
	4.24	麻原が、公判の中で一連の事件は弟子たちの犯行という認識を示す。	
	8	精神的に不安定になり、自分の尿を飲んだり、幻聴があったりする。	
	9 頃	手づかみで食事をするようになる。	
	12.22	麻原は医師に自分が末期の白血病だと主張する。	
1998	5.26	地下鉄サリン事件などで、東京地裁が林郁夫の自首と犯罪解明に対する貢献を認め、異例の無期懲役判決、6月9日に確定。	
	5	職員に対し「わたしははめられた。もうそろそろ私の人生に幕を閉じたい。お願いだから青酸カリを下さい」等と述べる。	
	10.23	坂本弁護士一家殺害事件などで、東京地裁が岡崎一明に死刑判決。オウム事件で初の極刑判決となった。	
1999	1.5	麻原は医師に「心臓が止まっています。止まっても生きています」と主張。	
	4	担当職員に「そろそろ暑いので衣替えをしたいのですが」と申し出るが、通常はほとんど房内で安座して独語を繰り返す。	
	9	教団が活動休眠宣言。	
	12.1	教団がはじめて、一連の事件への関与を認め、被害者への謝罪と補償を明言した。	
	12.3	オウム新法（団体規制法、被害者救済法）が成立、27日に施行。	
	12.27	公安調査庁がオウム新法（団体規制法）に基づき、公安審査委員会にオウム真理教への観察処分を請求。	
	12.29	上祐が出所。	
2000	1.18	教団の名称を「アレフ」に変更することを発表。	
		上祐が会見で、麻原が一連の事件に関与していたことをはじめて認めた。	
	1.31	公安審査委がオウム真理教に対し、3年間の観察処分を決定。	
	4	食事は自分で取るが、入浴やその後の着衣は職員が介助。運動は職員が手を引いて導く。独語以外に声を発することなく、意思表示は身体言語のみ。	
2001	3.7.	麻原が失禁を認めたため診察を受けたが、正常の範囲内。おむつを着用するようになる。しばらくは自分で便所に行くこともあったが、その後はもっぱらおむつに排泄するようになる。	2001.5.30 フランスで反セクト法成立。
	7.3	麻原は、おむつの上からパンツをはかせようとした職員に対して暴行し、保護房に収容される。	
2002	2 頃	職員が布団を敷くようになる。	
	12.3	右臀部の隆起を診察されたときに麻原は「坐りダコです」と発話。	

年	月日	オウム真理教関係	社会的事象
	12.25	医師の問いかけに対して無言が始まる。	
2003	4	論告求刑公判において死刑を求刑。	
	6.21.	医師の問いかけに対してときおり顔を上げて「あー」と声を出すのみ。	
2004	2.27	東京地方裁判所が検察の求刑通り死刑判決を出す。拘置所に戻ってから「なぜなんだ。ちくしょう」と大声を出す。	
		弁護側が東京高等裁判所に即日控訴。	
2006	3.27	東京地方裁判所が控訴を棄却。	
	3.30	弁護側が東京地方裁判所に異議申立するが、棄却される。	
	7.7	入浴場で突然立ち会い職員に対し「俺と話すのか。話していいのか」と述べたが、職員が「どうした」と問うと無言になる。	
	9.15	最高裁判所が弁護側の特別抗告を棄却。死刑判決が確定。	
	10.20	運動中、野球の投球フォームを行い、「大リーグボール3号だ」「甲子園の優勝投手だ」という。	
2007	4.4	弁護士接見中に陰部を出して自慰行為を行う。その後、接見の際に頻繁に自慰行為が見られる。	
	5頃～	房内でズボンやおむつを脱いで頻繁に自慰行為を行うようになる。	
2008	11.10	弁護側が東京地方裁判所に再審請求。	
2009	3.17	東京地方裁判所が再審請求を棄却。	
	3.23	弁護側が即時抗告。	

* 公判資料、一橋文哉『オウム帝国の正体』（新潮社、2000年）などに依拠。主要な犯罪行為などについて網がけで表示した。しかしすべてが教団の犯行と立証されているわけではない。

注

1. 本論は、國學院大學において2008年8月25日に開催された研究フォーラム「教団資料の分析方法——オウム真理教の教団資料をどう扱うか」における「南山宗教文化研究所所蔵オウム真理教関係資料の整理状況について」という報告と、南山宗教文化研究所において同年12月10日に開催された所員セミナーにおける「南山宗教文化研究所所蔵オウム真理教関係資料の意義について」の発表原稿を拡充したものである。また、これは、2009年度南山大学パッへ研究奨励金I—A—2の研究結果の出版である。

2. 麻原控訴審弁護人編『獄中で見た麻原彰見』インパクト出版会、2006年。また、このような精神状態の麻原を死刑にすることの問題点については以下を参照のこと。野田正彰他著「麻原死刑」でOKか?』ユビキタ・スタジオ、2006年。

3. 死刑判決が出たと聞かされたとき、麻原が「なぜなんだ、ちくしょう！」といったという話も伝えられており、麻原の精神が実際に破綻しているのか、それとも、麻原があくまで精神の破綻を装っているだけなのか、いまだに議論がわかれるところである。（2004年11月29日付で東京高等検察庁に拘置所長名で提出された報告書。「オウム真理教元代表・松本被告、拘置所での言動 報告書の全容判明」朝日新聞朝刊、2006年1月30日参照。なお、入手できた資料に基づいて年表に麻原の言動や異常行動についてまとめた。）あくまで私信ではあるが、精神科医のロバート・リフトン教授は、すでに1998年くらいの段階で麻原の精神が破綻している可能性を示唆していた。教授の説では、グルと弟子は共依存関係にあり、弟子が弟子でなくなるとグルはグルでいられなくなり、麻原の弟子たち、とりわけ井上が反旗を翻したため、麻原は無意識的な逃避から深い退行状態に入ったのではないかとのことであった。

4. 田口修二事件とは、1988年9月に富士山総本部道場で修行中に死亡した在家信者〔真島照之〕の遺体を護摩壇で焼却した際にその事件にあわせて知るところとなった出家信者の田口修二が、強行に一グルを殺してでも辞めたいといったとされている——脱会を希望したところ、翌年2月にコンテナに監禁され、さらにリンチを受けて殺害された事件である。そのときに、幹部会議において「グルがやれといえどボアできるか」、要するにグルが殺せといえど殺せるかと問われ、主要な幹部が承諾したとされる。そして、実際、田口はコンテナ内で殺害されたのであった。これは宗教法人として認可されるための隠蔽工作であったと考えられている。

5. 島田裕巳氏『オウム——なぜ宗教はテロリズムを生んだのか』トランスビュー、2001年、pp.168ff.

6. 同書、pp.168-169.

7. 同書、pp.160-170.

8. これに関しては、以下の引用を参照のこと。

9. ときには公判の中で別の形で引用されることもあった。降旗賢一『オウム法廷』5、朝日文庫、2000年、

102-3頁参照。第1回公判の検察側冒頭陳述において一部引用されたこの説法は、今日まで資料的な裏付けがなかった。

10. ヒンドゥー教では43億2千万年という推計があるが、仏教では比喩的にしか表現されていない。いずれにしても、劫は、宇宙が生じて消滅するまでの時間のよう、麻原がいうのよりはるかに大きな宇宙論的な時間区分を表していると考えられる。

11. 『ミラレバ』おおまさのり訳編、めるくまー社、1980年、pp.101-2参照。これは、1976年のオウムファンデーション版の再版と考えられる。

12. 島田、前掲書、p.164.

13. 同所。

14. 『ヴァジラヤーナコース・教学システム教本』（第3話（1989年9月24日世田谷道場）、1994年、pp.83-84。この文章は、以下のHPで閲覧することができる（2009年5月10日現在）。

<http://www.bekkoame.ne.jp/i/shinzinrui/vyogaku.htm>.

わたなべ・まなぶ
本研究所第一種研究所員

